

体得のフィールドワーク：フィールド参入における 技能習得と関係性の変容

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学府教育学部門：教授

翁，文静
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

宮本，聡
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

金子，真紀
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7385184>

出版情報：国際教育文化研究. 15, pp.1-21, 2015-10-28. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



体得のフィールドワーク

ー フィールド参入における技能習得と関係性の変容 ー

坂元 一光 翁 文静 宮本 聡 金子 真紀

はじめに

本稿は芸能や医療・福祉の場など特定の技能(資格)を中核として成り立つ実践的コミュニティのフィールドワークの事例をととして、フィールドワーカー自身による当該技能の習得がコミュニティとの関係性の変容とどのように関わっているかについて自己省察的に検討することを目的としている。フィールドへの参入過程のノウハウや要件等に関しては、近年多くの関連書籍のなかで言及され、ある程度の共通理解を得てきているけれども、それを現場に特有の技能を習得する、あるいは資格を取得する過程と関連づけて論じたものはそれほど多くはない^[1]。こうした技能コミュニティへの参入においてフィールドワーカー自身が技能の習得に取り組むことは、フィールドで展開する人びとの技術的实践や意味世界についての理解を身体知(embodied knowing)レベルで深めるとともに、習得の過程(あるいは習得に取り組む姿)そのものがフィールドワーカーと現場の関係性を社会的次元や身体的次元において様々に更新していくことが予想される。また、このような場に参入しようとするフィールドワーカーは何らかの専門性を駆使して課題解決や提案を目指す支援者というよりも、むしろコミュニティの新参者として、あるいは技能コミュニティの初心者として「そこに参入させてもらおう」という自らの周辺の立場を否が応でも自覚させられる。それは近年の課題解決や提案を重視(あるいは当然視)するフィールドワークにもとづく研究や教育の流れのなかで抜け落ちがちなフィールドワーカーの学習者(学び手)としての基本的立場についてあらためて想起するための糸口を提供していると思われる。

今回の執筆者たちはいずれもフィールドワークの一環として民族芸能や民俗芸能、あるいは医療的、福祉的ケアに関わる特定技能の修得に取り組んでおり、各人のフィールドへの参入や理解において自身の技能習得の行為がもつ可能性や課題を考えるにふさわしい事例である。芸能の技能に関しては坂元が能の金子は朝鮮太鼓の技能習得を試みている。金子は在日コリアンの文化的実践(祭り)をととして若者世代のアイデンティティ形成の解明をめざし朝鮮太鼓に取り組んだ。金子の朝鮮太鼓の訓練はコミュニティへの参入の手段であるとともに、その研究の切り口に選んだ芸能の身体的表現とアイデンティティの関係性の解明にも深くかかわっている。坂元は民俗能の伝承メカニズムの解明において能の身体技法や場(観客を含む舞台)のダイナミズムを重視する観点からその技能習得に取り組むことになった。また研究の手段であった能の習得が個人的な趣味として目的化する過程をフィールドワークの身体変容の一環として位置付けている。翁と宮本は医療的、福祉的ケアに関わる技能(資格)習得を

取り上げた。これらの領域は芸能とは異なりフィールドへの参入においてまず資格取得が必須要件となっている。翁は中国独自の産育専門家政婦「月嫂(yue sao)」の資格取得のための研修の場をフィールドととらえ研修仲間との関係性が親密なものへと変化する様子を実習での身体的相互作用にも触れながら述べている。貧しい地方出身者が多い家政婦業界では研究者という筆者の特権的な立場だけでなく中国特有の戸籍制度が生み出す不公平感によってもその参入が妨げられることが報告されている。宮本は障害者アート活動への参与過程においてその場が身体介護、医療的ケアのスタッフ等を含んだ協同的な関係性のなかで生み出されることを目の当たりにし介護・ケア資格の取得を決断した。宮本は自分が経験した医療的手技の習得や実践上の困難を丁寧に振り返ることを通して、他者の身体との関係性のなかで自身のケアする身体が次第に構築されそれとともにフィールドへの参入も深まっていく過程を報告している。

[1]芸能やモノづくり等の技能の体得を通して対象理解を試みた数少ない例として、吉田(2011)、大西(2014)、梅田(2015)などがある。

1. 朝鮮太鼓の習得とコミュニティへの参与

(1)問題意識とフィールドと出会い

現在、筆者(金子)は福岡市内で行われている朝鮮太鼓の教室に通っている。この教室は韓国で数年間修行を行った在日コリアン2世が講師をしており、在日コリアンや日本人の生徒、約20名にチャンゴやブク^[1]といった朝鮮半島伝統の楽器を教えている。筆者とこの教室との出会いは、1990年から福岡市内で唯一在日コリアンによって行われている、三・一文化祭^[2]へのフィールドワーク調査がきっかけである。この祭りで演奏を担当していたのがこの教室であった。

筆者は現在、在日コリアンの人々の文化的実践とアイデンティティ構築の関係性を明らかにしようと、特に身体的表現に着目しながら調査・研究を行っている。在日コリアンの人々が自分たちの「祭り」を行い、積極的に身体的表現(太鼓演奏や舞踊など)をし始めたのは80年代からである。それらの流れを総称して、在日コリアンによる「民族・民衆文化運動」とも呼ばれており、三・一文化祭もその運動の一つと考えられている。関西を中心に全国に広がっていったこの運動は、在日コリアンを取り巻く環境に多大な影響を及ぼした。ではなぜ多くの在日コリアンの人々が祭りを行ったのであろうか。これまでの筆者の研究(金子2014)において、日本社会への対抗意識や歴史的な背景などが影響していることは明らかとなっている。しかし、なぜ在日コリアンの若者たちは、そこまで身体表現、特に楽器演奏に魅了されたのであろうか。

マイノリティの人々の音楽実践の研究を行っている寺田(2010)は、マイノリティの人々が音楽に表現や主張の場を求める事例がこれまでも数多く報告されているが、十分に検討されてきたとは言えないと述べている。また、「音楽の内容との関連からアイデンティティの問題を考察する研究は極めて少ない」(寺田2010:22)とし、アイデンティティ構築と文化的実践の関係に着目することの必要性がうかがえる。さらに、「音が生成する場としての身体の問題などに踏み込んだ議論はほとんど行われていないように思われる」(寺田2010:22)とも述べており、身体の問題に目を向ける重要性を主張している。

筆者は三・一文化祭の観察を現在行っている。しかし祭りを観察しただけで、彼らの実践が理解できたことになるのだろうか。この祭りのほぼ全ての演目で、太鼓教室の演奏が行われる。この太鼓演奏というパフォーマンスがなされるまでには度重なる練習が行われ、また教室内の人々の関係性もパフォーマンスに影響を及ぼしてくるはずである。三・一文化祭という実践をみるためには、彼らが創りあげているパフォーマンス自体の観察、また太鼓教室というコミュニティの観察が必要になってくる。パフォーマンスという実践は彼らの日々の実践の積み重ねによって出来ており、彼らの生活の文脈の中から生まれる。このような問題意識から、太鼓教室への参入を試みたのである。

(2) 新参者としての参入: 太鼓演奏の技能習得過程

太鼓教室への参入は、三・一文化祭という実践をより深く理解し、彼らが形成するコミュニティの様相を明らかにするためであるが、このコミュニティに入るための最低条件として太鼓を叩く必要があった。

太鼓教室での練習は週に一度 4 時間程度行われる。参加者の年齢層は多様であり、男女比もほぼ同じである。教室には専用の靴とチャンゴという楽器が最低限必要となっている。その他のブクヤソゴといった楽器は、長くその教室に通っている生徒(古参者)の人々が持っているため、その都度演奏で必要な時に持っていない人は古参者に借りるようになっている。筆者も現在チャンゴを先生から一台借りて練習に参加している。

新参者(筆者)はまず、10 回は基礎練習を行う。その間、先生だけではなく古参者にも先生の代わりに教わることが度々ある。1 回目は先生から楽器の名前、姿勢、打ち方を教わる。習う際は太鼓を挟んで向かい合って座り、先生がお手本を見せ、それを真似して新参者は叩く。フォームなどを注意されながら、きれいな音が出るように一打一打丁寧に叩いていく。チャンゴは両面を叩く太鼓であるため、2 つのパチを用いて叩かなければならない。2 つのパチは形状が異なっており、そのため叩き方も異なってくる。両手の動きがそれぞれ違うため、注意する点も異なり、1回の練習だけではなかなかきれいな音を出すのは難しい。

なんとなく叩けるようになってきたら、基本的なリズムを叩いていく。最初に習ったこのリズムは、練習のウォーミングアップの際に必ず叩くようになっている。また、太鼓を叩く際はリズムを口ずさみながら行うよう指示がある^[3]。そうした方がリズムを早く叩けるようになるからだ。はじめはフォームを気にするとリズムがずれてしまい、リズムを意識するとフォームが崩れるということが起こる。古参者もみな、このような体験をしてきたと筆者に語っている。しかし、反復的に練習をしていくと徐々にフォームを直しつつリズムを叩けるようになっていった。

また、1 回目から全体練習には参加しなければならず、見よう見まねで叩かなければならない。筆者もはじめは全くついていけず、とにかくその場のリズムを狂わせないように、雑音になるべくならないようにするだけで精一杯であった。習ったフレーズがどここの部分なのかもよく分からず、全体練習のときに演奏する曲の構造が全く分からなかった。しかし、演奏できるリズムが増え、何度も全体練習に参加していくうちに、次はあのリズム、今度はこのリズムと流れがだんだんと見えてくるようになっていった。一応楽譜は配布されるが、その時々々のケンガリ^[4]のリズムで次はどの曲かを聞き分けなければならない。また古参者によるアレンジが入ったりするため、初めて聞くリズムなども耳に入ってくる。楽譜で基本的な流れを覚えつつ、耳ではじまりのケンガリの音を覚え、次の流れを聞きとらなければならないのである。

完ぺきではないが、筆者がこの聞き取りができるようになったのは基礎練習が終了したくらいの時期であった。

また、10 回目の基礎練習の合間には公演会の練習も行われた。筆者も 5 回ほどしか習っていない状態で舞台の上で演奏しなければならなかった。新参者にはチャンゴは難しいため、一面だけ叩くプクという楽器を演奏することになっている。小・中・高校生もほとんどがプクの演奏にまわる。この際楽譜ではなく、古参者の叩き方をみて、リズムと流れを耳と身体で覚えなければならなかった。現在も新しい演奏のほとんどは、耳と身体で覚えなければならない。このように筆者がフィールドワークしている太鼓教室では、「実践あるのみ」という場面が多く存在する。分からないところは自分で休憩中に古参者に質問し、先生や古参者の身体の動きをまねて技術を盗んでいかなければならないのである。

徒弟制のような学び方ではあるが、身体表現を教えたり学んだりする際は言語化できない部分が多く存在する。例えば、チャンゴを叩く際、円を描くように、「転がるように」音を出さなければならないが、このような表現だけではどのように演奏すればよいのか分からない。先生の手本を聞いて初めてその表現を理解することができる。また自分も叩かないと、身体の使い方を理解できない。例えば、手ではなく身体全体で叩くという場合どのように身体を使えばいいのか最初は理解できなかった。しかし、今自分は身体全体を使って叩いているという感覚が、練習をするうちに獲得できるのである。身体全体で叩いていなければ手が痛くなっていき、だんだん叩くことに疲れてきたり、音が転がるように出なかったりという違いに気づいてくるのである。

また教えるという場面においては、先生と古参者の教える内容が若干異なっている。古参者からは良い音が出るためのコツなど、主に楽器をどのようにしたら上手く叩け、どのようなリズムかということ教わる。先生から習う場合は、それに加えて、太鼓を叩くうえでの呼吸法や身体の使い方、また太鼓の歴史や演奏曲の成り立ちなど、技術に加えて太鼓に関する副次的な知識、いわば叩くうえで技術的には関係の無い知識も同時に教わる。何かテキストがあるというわけではなく、口承的に先生も自分の知識を伝えており、そこから先生の中にある民族性について知ることができる。在日コリアンの人々にとっては、自分のルーツに関わることであるため、自分の民族性へと繋がっていくのである。

現在教室に参入して約半年が経とうとしている。未だに全体練習ではリズムを間違ってしまうが、叩き方が様になってきたと古参者から言われ、身体的な変化が自分に起きていることを確認した。またそのとき、観察する側がむしろ観察されていたのだということにも気づかされた。新参者が古参者を観察し、その人が持つ技術を学ぼうとするのと同時に、古参者も新参者の身体の動きを観察しながら技術を教えているのである。技術の習得の場には双方の身体への眼差しがあって成り立つのである。

(3)太鼓教室コミュニティにおける位置取りと変化

この太鼓教室コミュニティに学習者として参入する中で、筆者のコミュニティ内の位置は何度か変化している。まず、彼らの練習や演奏会の連絡で用いている LINE グループ^[5]に参加ができたことが一つ目の変化である。LINE グループへは2回目の練習の際に入れてもらえることになった。そこでは練習や演奏会の情報だけでなく、楽器や衣装の購入方法やイベント情報、また彼らの日常を垣間見ることができる。練習中の写真や動画なども共有され、そのグループに入らないと観察できない彼らの様子がそこには存在していた。この連絡ツールへは太鼓を習わないと参加できないものであり、これがコミュニティの

中でも徐々に成員として認めてもらえるきっかけとなった。またその際、ニックネームをつける決まりになっており、成員との距離もそれによって縮まることができた。

もう一つ変化を与えた出来事として、同じ舞台に立ったという経験である。この経験によって、太鼓教室の生徒に加え、パフォーマンスの舞台と一緒に創りあげた仲間としての位置、演奏者としての位置を獲得できたのである。演奏を行う楽しさ、舞台を創りあげた達成感等の共感が生まれた。また、その後成員との相互行為においても変化が生じた。演奏者として楽器演奏の知識を積極的に教えてくれるようになったり、舞台上での振る舞い方やこの舞台ではここまでの技術が求められ、このような観客が観ているなど、構成員各自が自分の経験から得た知識を新参者に与えてくれるのである。

このように体得しつつのコミュニティへの参入は、コミュニティの成員としての位置、演奏者としての位置取りができ、観察者の位置だけでは獲得できなかった情報や遭遇しなかったような場面を観察することができる。技能習得を行う参入の仕方は、そのコミュニティのミクロな部分まで観察できるのである。

(4) 参与が生み出すフィールドの拡がり

太鼓を習うことでコミュニティの成員と信頼関係を築くことができ、また同時に、太鼓教室コミュニティに関係する他のコミュニティとの出会いへと、筆者のフィールドは拡がりを見せている。太鼓教室の人びとは三・一文化祭だけでなく、多くの舞台で演奏を行っている。また多くの在日コリアン、また韓国の演奏家と繋がりがあり、彼らからも度々太鼓や舞踊を習うことができる。太鼓教室で生まれる実践は、三・一文化祭だけでなく、他のコミュニティとの相互行為の中でも形成されている。筆者は新参者、演奏者としての位置があるため、他のコミュニティの観察も行いやすい状況を獲得できた。観察だけでは関わりにくい場でも、太鼓を教える・教わるという関係性が明確になっているため、互いに関わり易くなる。また、太鼓を叩くという技術を新参者ながらも持っているため、他の太鼓集団との演奏の違いがよく見えてくる。誰を師として教わるかによって、またどの地域の演奏を行っているかによってリズムはもちろん、身体の使い方も微妙に異なってくる。

コミュニティへ参与するために習うことにした太鼓であるが、それをツールに研究を行う上で有効的なネットワークの拡大をえることができたのである。

(5) 筆者が参与することでの変化とこれからの参与

筆者は、学習者としてフィールドに参与している。しかし、どこに所属で、何を研究しているのかという点はコミュニティで共有されている。そのため、筆者の観察者・研究者としての側面を相互行為中に成員から引き出されることがある。特に先生からは、太鼓の歴史的な流れや、一つ一つの動きの意味など、深いところまで教えてもらう場面がある。先生は、以前より太鼓の歴史的な部分を生徒と共有したいと考えていた。そのため、学術的な知識が多少なりともある筆者が加わったことで、太鼓の歴史的な部分が共有される場面が増えているのである。筆者は、学習者(新参者)としての位置を守りたいという考えもあるが、観察者・研究者という位置をどのように太鼓教室で確保していくかという点も、これから参与していく上で課題としていかなければならない。筆者が参与することで太鼓教室コミュニティも変容し、筆者自身も精神的、身体的に変容している。これからの太鼓教室への参与の中で起こる変化をつぶさに観察し、最終的に研究目的を明らかにしていきたいと考えている。

[1]チャンゴ、プクは、朝鮮半島の代表的な打楽器の一つである。チャンゴは両側面を叩く楽器で、形は「人」、音は「雨」を表す。プクは片面を叩き、ベース楽器の役割をもっている。形は「月」、音は「雲」を表す。

[2]1990 年から行われている祭りである。1919 年の三・一独立運動の精神を継承しており、三月末の休日に福岡市内の千代小学校で行われている。

[3]両手/ドン、左手/クッ、右手/タッと表現し、「両手、両手、左手、右手、左手」の場合、「ドン、ドン、クッ、タッ、クッ」と口ずさみながら叩く。

[4]ケンガリとは、金属製の楽器で、小型の銅鑼。片手に持ち裏面を抑えたりしながら、様々な音を出す。形は「星」、音は「雷」を表している。

[5]LINEとは、スマートフォンやタブレット、パソコンで使えるアプリケーション。チャットのように相手とメッセージのやり取りができる。無料で音声通話も可能。LINEグループとは複数人が同時にメッセージのやり取りができる、一つの機能である。

2. 仕舞と謡を学ぶ

(1)民俗能との出会い

現在、筆者(坂元)がフィールドとしているのは民俗能を伝承する東北日本の村落社会とその演能集団である。山形県庄内地方の黒川地区を中心に継承されてきた素人役者たちの演能活動(「黒川能」)に注目し、現代日本の民俗芸能の伝承過程や構造を明らかにすることを目指している。とりあえず教育人類学研究の文化継承論のなかに位置づけつつ調査をすすめているが、はじめからそうした明確な問題意識と対象設定のもとで始められたものではない。民俗能との出会いはまったくの偶然の所産であった。日本の吊るし飾り習俗の観光化と再創造についての研究の一環として山形庄内地方に通うなかで偶然その地の民俗能の存在を知るにいたる。知人にさそわれるまま黒川能の太夫に面談してその継承の現状等を聞いていくなかで、いつの間にか黒川の民俗能が研究対象として位置づいていった。

出会いの偶然さゆえに、また関連知識の欠如ゆえに、それは黒川能についての漠然とした疑問から始まった。能にまったく不案内なフィールドワーカーにとって、能は都市を中心に時々の支配階級や知識階級に愛好され洗練されてきた高尚な芸能のイメージが強く、それがなぜ東北の一地方農村で演じられているのか素朴な疑問を抱いたのである。この疑問はさらに二つの問いあるいは関心へとつながっていく。ひとつはいわゆる民俗学的な関心で、黒川能が 500 年余の長きにわたって地域社会で維持されてきた歴史的、社会的仕組みに関するものである。もうひとつは能の世界そのものに関するもので、理解困難な古語による謡や動き・表情の少ない舞台に人々はなぜ惹きつけられるのか。その問いは民俗能の世界にも共通していた。

ちなみに最初の問い、なぜ農民が能を舞うのか？に関しては比較的初期の段階で解決を見た。能の芸能史の知見から神仏への奉納芸としての能の原初的な姿が明らかになり、それが「翁」という特別な演目で今に引き継がれていることを知ったからだ。実際の舞台でも能に備わった神仏への奉納芸、あるいは神事能としての舞の様式を確認することで農村や農民と能の親密な関係性が了解され、「なぜ農民が能を舞うのか」という最初の疑問がある程度払しょくされた。関連してその延長上の問いである演能が維持されてきた社会的仕組みについても、たとえば村落共同体、宮座組織、能太夫による役者集

団の統制、技能継承の世襲などの主要概念を手がかりにすることである程度の説明の目途がたってきた。

一方、演能の意味世界や演能（パフォーマンス）そのものに関する問いに関しては、現在までのところとても十分とはいえない。能の世界に関する知識に加えて演能自体の臨場経験やそれに関わる人びと（役者と観客）の意味世界、感覚世界についての理解も必要となるからである。能の知識を持ちあわせないフィールドワーカーにとって能の世界は謎に満ちた領域である。他方、そこはその歴史や演技や鑑賞にかかわる豊かな蓄積を持っている世界である。民俗能を理解するのにその歴史的発展形である古典芸能としての能の世界を知っておくことは当然必要となる。そこで筆者は文献などで能の基本的な演技論や世界観の知識を学ぶ一方で近辺の能楽堂に通いながら少しずつ能の世界への参入を進めていった。そして演能それ自体に迫るための手段として文献的な知識に加えて舞と謡の学習（稽古）を通じた経験的アプローチを試みることになる。

ちなみにその後の予期せぬ展開として、手段としての鑑賞と舞いの技能習得が、それ自体目的性をおびていくという妙な経過をたどるようになっていく。その時フィールドワーカーにとって能の知識や技能は単なる理解の手段であることをやめ、それ自体が楽しみであり目的にもなりつつあった。しかし筆者はこうした事態を研究過程での逸脱とは考えておらず、フィールドワークのひとつの教務深い過程あるいは局面ととらえてもいる。フィールドワーカーが個人的に能に魅惑される、あるいは快美感覚をとまなう経験は、いまだ解決されないまま残されている、人々はなぜ能に惹きつけられるのか、そして黒川能はなぜ今でも人々を魅了し続けるのか、という問いに深く関わると考えるからである。能に対する快美感覚レベルでのこうした自己変容はきわめて主観的側面であるが、フィールド（能の世界）やそこを生きる人びととの関係性（参入）を規定するひとつの重要な要因であると考えている。

（2）仕舞と謡の習得過程

能を演ずる技能はさまざまな型をとまなう身体的な動きや扇などの道具の用い方からなっている。技能の学習は、最初から特定の家元に弟子入りすることはばかられたので、まずは身近な市民向けの能教室に参加することにした。筆者の実際の経験から家元制度下（社中）での修業は時間的にも金銭的にもかなりの負担を覚悟することが必要なことを知っていたからである。したがってここでの筆者は生徒であって弟子ではない。

能楽体験講座「宮崎教室」は宮崎宮ゆかりの能「箱崎」の仕舞（しまい）と「弓八幡」の謡（うたい）を学ぶ場であり、1期（半年）10回、各90分ほどの稽古をおこなう。主催は能楽体験講座「箱崎教室」実行委員会・財団法人「観世文庫」である。学習の成果は最終的に宮崎宮の祭礼「放生会」にて発表会として披露される。教室は毎年・後期2回開催され、今年で11年目をむかえる。練習の場所ははじめ神社の社務所に隣接した和室大広間である。講師は観世流のシテ方能楽師S氏である。

謡は能の声乐部分で曲節を伴う部分とせりふに相当することばの部分の総称であり、今期は謡本「弓八幡」をテキストに練習をする。またこの「弓八幡」に加え仕舞で謡う「箱崎」の資料も配布され練習する。40人ほどの生徒が大広間に列を作って座り、講師が適宜テキストを区切りながら謡った後に続けて生徒が謡う。初心者と経験者は一緒になって練習する。初心者は講師や経験者の謡を横で聞き、口まねしながら耳に刻み込む。録音が許されているため自宅で復習も可能である。謡本には抑揚や節回

し、発声法など様々な規則を示す記号が示されているが、初心者にとってはとても一度で覚えられるものではなく何の役にもたない。したがって記号や規則に沿って謡うというよりまずは講師や経験者の謡い方を真似ることに専念する。

仕舞は面・装束をつけず、仕舞扇を用いて特定の曲目の見せ所だけを舞うことであり、今期の曲目は「箱崎」である。教室の1～2回目に能の演技に必要な基本的な所作(カマエ ハコビ)と基本的な型(動き)打込ミ、サシ込ミ、ヒラキ、スミトリ、サシ回シ等について一通りごく簡単に学ぶ(ユウケン、シオリ、雲の扇など演劇的意味を持たせた応用的な動き(型)は教室で教えることはしない)。しかし短時間の指導でそれらを初心者が身体に定着させることはほとんど不可能である。講師がまず舞いの見本を部分、部分に分けて示し、初学者、経験者の順番で後について動きをなぞる。講師はつねに見本の型を示すわけではなく、横に控えて生徒の1人一人の動きや姿勢に不備がある場合にそのつど注意をうながす。4回ほどの割り稽古の段階を過ぎると、仕舞の全体を通して舞う稽古に移る。初学者にとって実際の動きの見本は、講師ではなく横で一緒に舞っている経験者の動きである。経験者とはいえ弟子でもなく、まして講師ほどの技量があるわけではないわけで、初学者は完全ではない見本を見よう見まねで真似ながら、あくまでも舞の「一応の」動きや流れを身に付けるのである。

以上のような学習を7回目まで終え、8回目からは練習の場が拝殿に移される。発表会の場が拝殿であり舞台本番に向けた準備をおこなうのである。参詣者のいない夜の拝殿は厳粛な雰囲気包まれており、稽古の始まりに行う神殿への礼拝(柏手)の儀式がその昔演能が帯びていた宗教的性格を彷彿させる。拝殿での練習は仕舞(「箱崎」)のみで経験者とペアをつくって行われる。これには本番の舞方が想定されている。ただの広間とは異なる臨場感がただようなか講師の細かな指摘を受けながら初心者たちのごこちない舞が遅くまで続く。

(3)技能習得と非言語領域への接近

筆者の能の知識および技能の習得は民俗能の伝承過程解明のひとつの手段としてスタートした。なぜなら民俗能の伝承局面は地域社会の文脈に埋め込まれた身体技法(「舞う身体」)の教育や学習の場と役者と鑑賞者とのダイナミックな相互作用の場において展開しているからである。そこで進行している芸能の伝承過程を理解するためには、地域の構造やそれが置かれたマクロな社会的文化的文脈の把握とともに、能をめぐる技能コミュニティで展開している役者の身体の用い方やそれを鑑賞する人びとの身体の在り方(「愛でる身体」坂元 2014)を一度自身の身体に迂回させつつ考えることは演能の世界のとくに非言語的な領域に降りていくためにはきわめて重要な方法であると考えからである。技能コミュニティへの参入にあたって、鑑賞の知識や審美眼、演技(身体の使い方)の知識を言語的次元ではなく身体的次元においてある程度具備していることは、能の世界のような技能コミュニティへの参入においても有効なツールとなるはずである。それは「やってみなければ分からない」(もちろんやってみたらといって何でも分かるものでない)という身体系の技能をフィールドワークしエスノグラフィックに記述するうえでの経験的で素朴な信念にもとづく想定である。

加えて、予期せぬ展開として先述した研究手段ではない趣味やそれ自体を目的とした能の世界への接近もある意味(事後的に)有効なツールとなりうる。一見、逸脱的にも映る筆者の態度や行動はフィールドやそこに生きる人びととの関係性においてささやかではあるが「関与と共感」の深まり(参入)につ

ながる自己変容、身体的変容ともとらえられるからだ。ちなみにこの自己変容は黒川に限らずそれぞれの能をさまざまなかたちで生きる人々との関係性のなかで生み出された変容と考えておきたい。はじめに述べたように黒川訪問で最初に出会った農村部の普通の人々の能を楽しむ姿は、これを都市部の教養層の趣味世界と信じ込んできた筆者にとって何とも意表をつかれる不思議な光景であった。普段着姿の村の老若男女が舞台そでを取り囲み演能に見入っている姿からは、大袈裟かもしれないが、都鄙や階層の違いを超えた文化の基層の部分に関わる能の根源的力が伝わってくるようだった。能の楽しさや魅力が皆目分らない者にとって、また日本の地域・伝統文化研究を生業(なりわい)の一部としている者にとって、その光景は単に不思議なだけでなくある種の羨望と時に後ろめたささえともなって映った。地域に生活に根ざした能やそれを生きる人々の生を理解し書きとめたいと右往左往するうちに、いつしか筆者は研究の手段としてではなく自分自身その魅力的「であろう」世界のことを知りたい、快美感覚を共有する鑑賞者として一緒に場に浸りたい、という漠然とした憧れを抱くようになったのだ。それは調査手段としてだけではなく分かること、楽しむことも目的としながら舞う技能や愛でる技能の習得へと向かうことになる。

能の知識を増やし技能の習得に努めたとしてもそれでフィールドへの参入が深まったかといえ今のところその目立ったきざしを見いだせないでいる。黒川はあいかわらず遠く、地域や演能コミュニティへの参入もきちんと達成されていない。能の世界への個人的参入が単なる自己満足の变容に終わってしまうのか、フィールドとの関係性を変容させることにつながるのか、フィールドワーカーの自己モニタリングはさらに続く。

3. 家政婦月嫂になる

(1) 月嫂の資格を取る

筆者(翁)は2年前から中国都市部上海市における産後一ヶ月の養生期間の伝統習俗である「月子(yue zi)」の変容およびその月子に関わる専門家政婦「月嫂(yue sao)」について研究・調査を継続している。はじめて月嫂に出会ったのは、8年前の自らの出産時であった。当時、育児ネットワーク、育児支援に関心を抱いていた筆者は、月嫂を中国都市部における産育支援の重要な一員と位置付け卒業論文にまとめた。修士課程に入り、同じテーマについて研究を続けていた筆者は、月嫂たちに接触しているうちに次第に彼女たちの行う「科学(kexue)」的な産育実践に関心が移っていったのである。

産育の専門職でありながら職業家政婦としても認識されている月嫂に対して、筆者はさまざまな疑問を持つようになった。例えば、どんな女性が、なぜ月嫂になるのか、それはどのようにしてなれるのか。彼女たちはどこでどのような知識・技術を身に付け、実践していくのか。また、月嫂たちの果たす役割は出産・育児の担い手だけなのか。言い換えれば、月嫂の出現・普及に関する社会文化的背景に関するもの、月嫂の行う産育実践および「科学」月子の中で彼女たちの位置づけに関する問題関心である。

一つ目の問題意識、つまり、月嫂の出現・普及に関する社会文化的背景については、中国国内の学術論文、育児雑誌、テレビなどのメディアによって断片的に言及されるようになっている。これらの調査データは十分に信憑性が高く体系性があるとはいえないためこれを補足するために、筆者は上海における様々な月嫂関連施設を訪ね、職員などにインタビューを行い、施設のチラシ、ホームページなど

の情報を活用するなどしてきた。結果として、月嫂の出現や普及の社会文化的背景についての説明に関してはある程度可能になってきた。

一方、二つ目の問い、つまり月嫂の行う産育実践と彼女たちの社会的位置づけに関しては、現場に入らなければ有力な情報が手に入らない現状があった。先述した通りに、月嫂に関心を持つ前まで、筆者は中国都市部における産育のネットワーク・支援について研究を行っていた。その際に運よく上海市のある大学の教授の紹介で病院や早期教育センターなどの産育施設に入りフィールドワークを行うことができた。いわば「トップダウン」、「ツテをたどる」、「コネクションを使う」という形での調査が可能であった。しかし、月嫂研究に切り替えた場合、このような方法は全く使えなくなった。それは月嫂を管轄する政府機関が教育局ではないため産育のネットワーク・支援研究のときのコネクションが使えなかったのである。筆者は月嫂に関する詳しい情報を収集するため、月嫂のトレーニングセンターや月嫂が働いている病院に電話したり、直接訪ねたりしたが、一律に「詳しく知りたいなら、授業料を払い、生徒として月嫂養成訓練を受けてください」、「月嫂の資格がないと、現場に入れない」（場合によっては、筆者が企業スパイと疑われ、「教えるわけがない」と言われたこともあった）という回答が返ってきた。そこで、筆者は否応なく半強制的に女性たちと同じ月嫂養成訓練を受け、国家資格を受けるというフィールドへの参入方法を選択することになった。

(2)技能コミュニティにおける訓練の実際―月嫂養成トレーニングセンター―

月嫂の行う産育実践と彼女たちの位置づけを明らかにするため、2013年8月から筆者は月嫂の資格取得をスタートした。なぜなら、「そうしないと、月嫂に関する詳しい情報が得られない」という理由に加えて、自らの出産時に身近に接した月嫂たちの高度な知識や巧みな技術の獲得、形成に対して純粋な興味もあったからである。

まず、筆者は上海のある月嫂養成トレーニングセンター（以下 H トレーニングセンターと称する）において、155 時間の養成訓練に参加した。講師らが午前中に教科書に基づいて、理論的な知識を説明し、午後には 40 名程の生徒たちを 4、5 人ずつグループに分け、オムツ替え、産婦体操指導など様々な産育に関する技術を練習させた。この養成訓練を終えた生徒たちは 2 ヶ月ごとに行われる月嫂の資格試験を受ける。月嫂の試験は養成訓練同様に理論的な知識と技術の両方を含み、両方の試験に合格すれば、後日上海市人力資源・社会保障局の配布する証明書を渡される。筆者の同期の殆どは 2013 年 10 月の試験に臨んだが、筆者は日本と中国を往来するなど様々な事情により同期の月嫂たちより半年遅れて試験に臨み、無事資格を獲得した（翁 2013）。

また、筆者は月嫂養成訓練と並行して、H トレーニングセンターで行われる二つの特別訓練―「催乳師」及び「月子料理栄養士」（催乳師は日本の助産師のように母乳マッサージを施術する専門家であり、月子料理栄養士は月子中に産婦のために特別な月子栄養料理を作る専門家である）にも参加した。二つの訓練とも二日間かけて行われ、それぞれ理論と技術の試験があった。筆者はこの試験にも合格することができ H トレーニングセンターと月子料理会社の発行する合格証明書を手にした。

上記の月嫂養成訓練、特別訓練以外に、H トレーニングセンターは、実務経験の少ない女性たちのために、有料ではあるが同区にある産科病院での三日間の研修も提供している。筆者は 2013 年 9 月にこの研修に参加した。筆者の受けた研修では、一日目は指定されたベテラン月嫂に付き、病院の様子

やベテラン月嫂の仕事ぶりをただ見るだけであった。二日目から、簡単な仕事、例えば、新生児のおむつ替え、産婦の体の清拭などを任され、最後の日に、調乳、メートルによる授乳や新生児沐浴後の着替えなどの仕事も体験できた。

(3) 参与の深まりと拡大

半ば行きがかり的に取り組むことになった月嫂の養成訓練への参加と資格取得がはじめてからスムーズにいくはずがない。他の取得希望者たちとはちがい上海戸籍を持ち、高学歴かつ年齢の若い筆者はHトレーニングセンターに入ったばかりの頃、農村戸籍を持つ同期の女性たちに素性を疑われ、排除されていた。筆者が周りの女性に声をかけても、「上海の戸籍を持っているなら、政府からもっといい仕事を紹介してもらえるはず、なぜ家政婦の月嫂を選ぶの？ 私たちと競争しないでね」、「高そうな昼ごはんだけ。この缶詰めのお粥って、10 元もするでしょう。私なんか昨日の残ったおかずを食べてるわ」など反感を伴った返事が返ってきた。しかし、毎日研修を受けているうちに、彼女たちの態度が次第に変わってきた。授業内容が分からない際に、筆者のノートを借りる女性も現れ、またグループ演習の際に筆者の間違いを指摘してくれる女性も出てきた。今にして思えば、私たちが研修や授業を通して産育知識と技術を共に学び、そして妊婦役と月嫂に分かれ実際の介助を行う役割実習などで互いに身体を触れ合うことがあってこそ、彼女たちに受け入れられていったと言える。月嫂(候補者)たちと仲良くなるにつれて、月嫂についての認識も深まり、文献やメディアでは言及されていない事実も明らかになりつつある。それだけではなく、月嫂の中にフィールドワーカーにとって貴重なキー・インフォーマント(紹介者)も現れ始めた。例えば、筆者のノートを借りる H さんの場合、重要なインフォーマントであると同時に、筆者に知り合いの現役の月嫂たちを紹介してくれる大切な仲介者となった。その後、「H さんの友人」となった筆者は大した苦労もなく、現役の月嫂たちにインタビューを行い、月嫂派遣会社の経営者にも受け入れてもらうことができた(H さんとの間に友好的な人間関係と信頼関係、すなわちラポールを築いたことがその後の調査に役に立つが、2 年ほど付き合っているうちに、筆者に「貴方は友達だから、今日仕事の話は一切せず、楽しく飲もう」と言われた際に、すこし複雑な気持ちになった)。

一方、病院での研修に参加したときには、友人としてのインフォーマントではなく師匠としてのインフォーマントにも出会った。ベテラン月嫂にとって筆者は「見習い月嫂」「弟子」である。実際、病院現場ではベテラン月嫂と新米月嫂の関係は「师徒 shi tu(師匠と徒弟)」と認識されている。「弟子」である筆者に対して、ベテラン月嫂が常に指示を出したり、怒ったりしていた。謙虚に学ぼうという姿勢を示しながら、汚い、きつい仕事(産婦と新生児の排泄物の処理など)を率先してこなし続けるうち、怒られる回数が徐々に減り、師匠の技も少し教えてもらえるようになった(教えてもらったとはいうものの、いまだに習得できない)。三日という短い研修期間を終え、師匠の W さんに「また研修させてください」と頼むとうまく了承を得られた。翌年の追加研修の際に、運よく師匠に付き添うことができ、普段なかなか入れない雇用者宅に行き、参与観察を行うことができた。

上記のように、学習・資格の取得(のフィールド)は月嫂という技能コミュニティへの参与をうながすだけでなく、現役月嫂、ベテラン月嫂、雇用主までフィールドワーカーの人間関係を広げることできる。さらには筆者自身の知識・技能の深化にもつながる。つまり月嫂の養成訓練への参加と資格の取得前(出産時)には、身なりや年齢などで月嫂の優劣を判断していたが、今になれば、乳幼児の抱き方や、

ミルクを与える際の座り方を見るだけで、熟練者であるかどうかを判断できるようになった。もちろん「見てわかって」「自分でもできる」というわけではない。有能な月嫂としての技能、技術の体得にはさらに長い経験の月日が必要であろう。

4 .介護の専門職になる

(1) 「介護」「介助」の現場との遭遇

筆者(宮本)は、障害がある人たちの生の構築過程に関して調査研究を行っている。中でも、彼ら／彼女らの実践する創作活動や身体表現といった、いわゆる「アート」と呼ばれる活動に焦点化し、その実践がどのように当事者の生の構築に関わっていくのかを明らかにするという目的でフィールド調査を行っている。本稿においては、「アート」に焦点化したときには、周辺領域、副次的な位置づけとなる障害に関わる専門的な技能、いわゆる「介護」「介助」といったケアする技能に目を向けている。というのも、障害に関わるフィールドに参加していくことは、それが「アート」という非日常の文脈、芸術的な領域におかれているにも関わらず、必然的に当事者と医療や福祉の接点やその支援を行う専門職の人々に出会うこととなる。例えば、筆者は、2014年9月から障害のある人たちへの在宅ケア業務を主として行っているNPO 法人が主催する障害のある人や高齢の女性たちによる演劇及び演劇ワークショップへボランティア(裏方)として関わりつつ、調査を行っていた。その参与の過程で、障害のある人たちへの介助場面、車いすへの移乗、食事や排泄の介助といった身体介護、痰の吸引といった医療的なケアの必要な役者への適切な医療的ケアといったものが、介護福祉士の資格を持つNPO スタッフらによってなされている現場を目撃する。ここで行われている介護や介助は、演劇を成立させるために必要不可欠なものであり、また障害がある人たちの生身の生を基盤とした社会関係を必然的に発生させている。すなわち、「アート」を切り離された生成物と捉えるのではなく、他者との関係性を含んだプロセスと捉えた時、このような専門職による介護や介助も、その内部に組み込まれていくと考えることができる。作品制作の場においても、アート作品をアーティストという超越的な個人による生成ではなく、周囲のアクター(家族、スタッフ)との協同的な関係性の中で生成されていくと捉える視点も近年の文化人類学や社会学におけるアート研究において登場している。そこで、筆者自身、当事者の生身の生を巡って、他者との親密な関係が結ばれる介護、介助の現場への関心を深めていった。一方で、他者の身体への介入を伴う介助や介護、特に医療的なケアは、医療従事者や家族といった行為者のみといった明確な制限されているものである。そこには、行政によって定められた明確な認可資格が存在している。そのような中で、障害がある身体を中心として織りなされる関係性を、より理解するために介護、介助に関わることが可能な(公的に許可された)資格の取得へ向かう。

また、このような理解への道筋とは別の動機づけも存在する。大学に籍を置くという筆者自身は、「理論か、実践か」という対立に行き当たる場面がこれまであったということも資格取得へ導かれたという側面もある。正統的な参与観察において、現場におけるフィールドワーカーは、観察者としての性格を持っている。しかし、障害のある人々を対象とするデリケートなフィールドにおける調査において、どこか観察者としていないことのできない自分自身の立ち位置の存在があった。同時にフィールドにおいて、当事者性や、研究成果の現場への有用性といったものが求められていることが、ひしひしと感じられていた。このことは、近年の文化人類学における、公共人類学や「支援のフィールドワーク」[小國, 亀井, 飯

嶋 2011]といった新しい議論にも通じると考えられる。そのような文脈において、参与もしくは関与の「足場」としての資格取得へ向かっていったという側面も否定できない。以降では、医療福祉領域への一つの参与のあり方としての、初学者である自らの知識、技能の習得に着目し、専門職の道程をなぞる参与経験を記述し、ひとつの参与の方法としての可能性を示唆したい。

(2)ケアする身体の構築

ここでは、具体的に行った参与の実際を記述したい。筆者は、介護職員実務者研修^[1]の取得に参与し、介護にかかわる技能習得に努めた。この資格は、介護職員として、高齢者や障害がある人々への適切なケアを行っていくことができる資格である。まず、資格を取るために、介護福祉士養成の研修機関^[2]に通う。この機関においては、同様の資格を取得するために通ってきている者たちとともに講義や実技の習得を行った。多くは福祉の職種に就いている者や、行政の求職者支援の下で資格取得し、就職の機会を求める者もいた。研修機関においては、介護福祉士養成のためのテキスト^[3]を用いた座学(基礎研修)や、人体の模型やその他の器具を用いた実技に分かれて、技能習得が行われる。また、その後、医療機関や福祉施設での実習を行うことで、実践においてケアを行うことのできる資格が与えられるという流れである。

この介護に携わる資格に関しては、近年の社会の高齢化や医療技術の進歩といった状況の中で、変化にさらされている資格である。特に、従来医師や看護師といった医療従事者、もしくは医療従事者の指導を受けた家族にしか認められていなかった侵襲的な医療的なケアの一部(喀痰吸引、経管栄養)を、人材供給という観点から介護職の資格自体に組み込むという動きが見られる。また、教育分野においても、特別支援教育の充実の中で、医療的なケアの必要な児童への配慮から、特別支援学校に勤務する教員資格の中に、この医療的なケアを組み込むという動きも近年みられている。このように、医療的な技能や知識といったものが、病院やその他医療機関を越えて、他の機関に滲入していく現場でもあると言える。本稿では、取得した介護職員実務者研修の資格の中でも、特に福祉分野と医療分野の密接に関わり合う、医療的なケアについての技能や知識についての習得過程に注目していく。

①座学

座学においては、主に介護福祉士養成用のテキストのうち、「医療的ケア」というテキストを用いて行われる。そこでは、「人間と社会」「保健医療制度とチーム医療」「安全な療育生活」「清潔保持と感染予防」「健康状態の把握」という基礎的な知識と、医療的ケアの実践である「喀痰吸引」「栄養経管」に関する知識(手順や器具等)の講義を、看護師の実務経験者から受けていく。そこにおいてはテキストに沿って、講師の現場での経験も含めて、知識の伝達が行われる。筆者の場合は、毎週土曜日に約 50 時間、約一ヶ月半を通して、テキスト的な知識の習得を行った。座学において、重視されていることには、医療的な倫理観や概念、規範についての伝達である。特に、感染予防や患者の生活の質(QOL)といった医療にかかわる基本的な心構えなどが強調される。また、具体的な人間の身体の仕事について講義も行われ、特に介護職の医療的ケアに関わる「呼吸器系」「消化器系」の2つの人体システムについての知識の伝達が行われる。

②実技

実技は、シュミレーション用の人体模型に対して、実際にケアを行うための器具を利用して行われる。実技は主に2つの医療行為とそれに伴う5つの手技の習得が図られる。

「喀痰吸引」とは、自発的に痰や唾液を体外へと出すことのできない、もしくは支障がある者に対して、吸引器にてサポートする医療行為である。この「喀痰吸引」においては、吸引チューブを口、鼻、もしくは気管カニューレ[4]のいずれか部位から挿入し、吸引する。そのため「口腔、鼻腔からの吸引」「気管カニューレからの吸引」「人工呼吸器装着者への吸引」という3つの手技からなる。

もう一つの医療行為は、「経管栄養」と呼ばれるものであり、食事を口から摂取することの困難な者に対して、半固形の栄養剤を管にて注入するものである。鼻腔から胃までの管を通すもの(経鼻経管)と腹部と胃の表皮に管を通すもの(胃ろう)というように、「経鼻からの経管栄養」と「胃ろうからの経管栄養」という、2つの手技[5]がある。そして実技においては、各手技の習熟と講師からの5回ずつ合格判定が認められなければならない。

これらの実技における技能の習得過程においては、具体的な医療的なケアを行う場面を想定し、人体模型を患者と見なしながら、それぞれの医療行為を行っていく。初学者にとって、より具体的な場면을シュミレートする能力を必要とする。これは、身体への介入というリスクを伴う文脈の中で、いかに現場にはいる前に、具体的な手技を行う場面を想定し、習得を行っていくかという医療福祉の現場の固有の学習スタイルが存在していると考えられる。そのため、実習の部屋を病室と見立て、人体模型を患者と見立てながら、実技は進んでいく。この手技の過程においては、二つの重要な行為、患者に声をかけること(「声かけ」)と、患者に対し具体的な適切な医療的なケアを行うこと(「手技」)が存在する。この二つを、組み合わせて、一連の動作として医療行為として行っていくことが求められる。熟練者は、無意識的に手技を行っている様子があり、これらの技能を見事に身体化している。初学者は熟練者への接近の中で、その他の領域の実践の学習過程と同様に熟練者の身体を模倣していくことで、より熟練へと近づいていこうとするが、一方で、ただ模倣していくだけでは、その手技を身体化していくことができない。ここでは、医療的ケアの習得過程において、筆者の困難を抱えた行為を取り上げ、その習得における特徴を述べたい。

初学者の筆者にとって、まず困難を感じることであり、声をかけながら、手技を行っていくことの難しさがある。そもそも、入室時にどのように声を掛けたら良いのか、どのような言葉を用いるべきか等、戸惑いを覚える。また、他の受講生に見られながら、非生物である人体模型に対して「声かけ」を行う居心地の悪さを感じる。この声掛けにおいては、医療における患者(当事者)主権という考え方が、基底に存在している。そのため何か細かな手技をする上でも、一つ一つ確認・了承を取っていく必要がある。例えば、筆者が熟練者の講師によって注意されたこととしては、経管栄養のときにおいて「栄養の方を流していく」という表現を用いた時である。講師は、「栄養」ではなく「食事」と、「流していく」という表現ではなく、「始めていく」という表現の方がよいという。このように、患者本人の視点や心情への配慮が求められる。また、このような患者への声掛けをしていくだけではなく、自分自身への声掛け、すなわち何をこれから行っていくかを確認しながら手技を行っていくことを求められる。

声掛けを身につけていくと同時に必要なこととして、手技を手早く確実にこなしていくことが挙げられる。ここにも初学者にとっての困難が存在する。慣れない医療器具の使い方はもちろん、初学者が特に困難を覚えるのは、独特の身体所作を成り立たせている近代医療的な概念である。特に、筆者の学ん

だ実技において、熟練者である講師から強調されていたものは、「不潔／清潔」の概念である。この概念は、医療的なケアを行ってゆく中で、感染予防や拡大防止という視点から、患者に接する根本的な行動(身体動作)基準になっている。例えば、患者に触れると、それまで「清潔」であった手は、「不潔」とみなされ、その「不潔」な手で、「清潔であるべき場所」等に触れることは、禁じられている。そして、概念によって、動作が規定され、また方向付けられている様子が見られる。吸引場面における「手」を例にしてみる。入室時は両手ともに清潔であるが、患者の状態確認を行うことで、両手は「不潔」になる。そこでアルコール消毒をすることで「清潔」な状態となり、さらに医療行為を行うために手袋を装着する。そして、実際に吸引を実施するが、吸引チューブを持つ手(右手)は手技を行うことにより「不潔」と見なされる。吸引器のスイッチは「清潔」であるべき場所であり、右手で、吸引器のスイッチに触れることはできず、まだ「清潔」な左手でスイッチを切らなければならない。むしろ、常に片方の手はこの吸引の手技においては、清潔に保っておかなければならないのだ。このように、「清潔／不潔」という概念が、人やモノと身体的な結びつき、手技における動作を決めていくことが伺える。この概念を内面化することは、手技の身体化していくことに繋がっていく。また、その習得において、ただ熟練者の身体の動きを模倣していくことだけでは、手技の習得へ結びついていかないことを示している。確かに、習得の初期においては、熟練者のお手本を模倣することで、なんとか手技を習得してゆこうとするのだが、それに終始してしまうと、ケアの状況を一つの場面に集約し、現場への応用が効かない。むしろ、身体の動きの背景にある文脈(知識)をつかむことによって、専門職の「生きた技能」として多様な状況、言い換えると患者や環境の具体的な個別性に初めて対応していくことができると考えられる。

③実習

座学及び実技の研修を終わると、具体的な現場(筆者の場合は医療機関において行われた)において、実習を行う。この実習は、教育機関において習得した技術を、生きた技能にしていく重要な期間である。

資格を取得するためには、実技において身に付けた各手技を20回以上ずつ現場の指導者の下で患者に対して行い、合格をもらわなければならない。教育機関における手技とは異なり、実際の患者に対して行っていく実習は、患者の身体状態や物的環境といった個別性への配慮が必要になってくる。筆者は、初学者という位置付けより、現場にとっては実習生という位置付けも生じる。

実習においては、研修機関といった安全空間ともいえる場から、リスクの伴う現場へと参与していくこととなる。また、筆者にとってこれは医療空間という異文化空間に投げ込まれることとなった。まず、「患者に対しどのように声をかけていくか」という専門職と患者の関係性(ケアする者とケアされる者の関係)への戸惑い、「チューブを鼻から入れることで、体を傷つけたりすることはないのだろうか」といった自身のケアへの不安とともに、「病院という空間でどのように過ごしたらよいのだろうか」という医療空間での立ち位置への戸惑いといった、様々な戸惑いが顕在化してくる。これに対し、病院のスタッフは、「まずは、病院という空間に慣れていくことが重要である」と述べるように、その空間においての専門職のペース、時間といったもの、医師・看護師・介護士といった医療の専門職の役割分担といったものを、その場に身を置いて行くことで把握していく。その中で、具体的なケアを行っていく。筆者の行うケアの内容は、

実技で習得した、「喀痰吸引」と「経管栄養」である。また、それだけではなく、介護職(看護助師)の仕事のサポートなどを空いた時間に行っていくこととなった。

ここで、技能の身体化ということに着目していくと、研修や実習で身につけたことを、現場の状況にチューニングしていく必要があるだろう。言い換えると、教育機関での研修において習得するマニュアル的な知識や身体動作と、状況に合わせた現場の実践知といえるものを「うまく擦り合わせていく」必要がある。その現場での手技において、考慮していかなければならないこととしては、患者の置かれている環境(身体、モノ)の違いである。例えば、吸引器ひとつにしても、患者によって機種が異なったり、また配置が異なっていることが多々ある。その都度、細かな身体動作を調整していくこととなる。熟練の看護師たちは、手技を行う上で、物的な環境を整えて始めていく。ベッドの高さを調節したり、手の届く範囲に物品を引き寄せる等、手技をいかに安全に、また効率的に行っていくかということを念頭においている。また、最も重要なこととして、当然のことながら、患者各々の身体が異なっていることが挙げられる。障害や疾病の違い、コミュニケーションの有無を含めた方法、体型といった要素によって、手技や声掛けの方法が異なってくる。つまり、このように実習段階においては、「個別性への向き合い方」を習得していかなければならない。

具体的な筆者の習得過程をなぞると、初めて入る患者に対しては指導の看護師が、どのように手技を行っていけばよいのかを説明してくれる。例えば、「この患者さんは、吸引する時は、右の鼻からした方が、うまく痰が曳ける」といったように患者の身体的な特徴を助言する。それに従い、指導者のチェックの下、手技をこなしていきながら、個々の身体的な特徴を把握していく。そして、何度も各患者へ手技をこなすことによって、徐々に向き合い方を身につけていく。

また現場の個別性に向き合うためには、「目(観ること)」「耳(聴くこと)」が必要となってくる。ここでいう目と耳とは、主に患者の状態を確認し、適切なケアを行っていく上での重要な感覚である。熟練者は、顔色やお腹のはり、呼吸状態などを確認すること、及び患者の主観的な訴えを確認しながら、手技をおこなっていくかどうかを判断していく。このような患者の状態の確認において、血中酸素濃度の確認など専用の医療機器を用いて数値的な判断も行うのだが、一方で、目や耳を用いたアナログな判断というものの方が非常に重要なのである。このように現場において学ぶ実習段階においては、適切なケアを成立させる個別性に対応する技術を習得していくこととなるのである。

(3)フィールドにおける変化

ここでは、先述した資格取得という参与経験が、いかに医療福祉的なコミュニティ(フィールド)と筆者自身の関係性に変化を与えたのかについて考察する。資格取得という中で、ケアする技能を身体化していく過程であったが、その後のフィールドとの関係性に変化をもたらす。

①フィールドでの位置づけの再編

まず、資格取得を通じて、より深くフィールドへの参与を可能にする。それまで、筆者は主にボランティアとして、フィールドに参加し、現場の実践やそこに関わる人々への理解を努めてきたが、医療福祉の現場においては、特に専門職と障害がある人々の身体的な関係への理解に限界が存在した。この資格を取得することで、それまで制限されていたフィールド(日常生活、家庭生活等)への参与を可能にしていく側面はあるだろう。筆者は、現在取得した資格を持って、障害がある人への在宅支援の手伝

いを行いつつ、参与調査を行っている。そこでは、障害があること、またそれをケアしていくということの生々しい現場が見えてくる。

資格の取得という過程を踏んだことで、フィールドでの新しい人間関係のあり方を構築する。これは、フィールドワークにおけるラポール形成に繋がる。まず、同じ資格を持つものとしてケアの専門職との関係が変わってくる。以前のフィールドの専門職からの筆者への目線は、「研究者・観察者」といったものであり、どこか現場にとっての「お客さん」として接せられていた。資格を取得以後の調査においては、フィールド先からは「スタッフ」としての位置づけを得、障害がある人々への介護や介助を求められるようになってくる。このように関わり方の変化の中で、スタッフたちが、介護や介助に関わる葛藤や難しさ(障害がある人々へのケアのリスクや各々の身体に合わせたケアの方法)や仕事に対する悩みなどを、筆者に対して共有や吐露する場面も増えてくる。また一方で、「研究者」としての筆者の側面である研究調査へも、以前より積極的に助言や情報提供等を行ってくることも多くなった。

また、筆者は、専門職の技術を習得する中で、彼らの身体に対する新しい意味付けを見出す側面もある。具体的には、専門職の行っている身体動作とその難しさへの気づきである。以前において、専門職の行っている障害がある者への介助、介護に対し、「トイレの介助」「痰の吸引」等といった一つのケアの身体行為として一面的に捉えることしかなかったのだが、技術の習得以後においては、その行為の細かな動作の意味やリスクを含んだ難しさや、各人が行っている工夫等、つまりケアする人々の主体性や能動性が徐々に見え始める。これは、技術の習得という経験により、同じ技術を共有する中で、専門職の人々の実践への身体を通じた共感的な見方が生じたことが考えられる。

一方で、障害がある人々との関係も変化する。それまでなかった身体を用いたケアを通じた関係が生まれることとなるのである。研究調査という文脈において、方法論的な限界で文化的な他者として切り取ることで当事者へ接することしかできない中、自ら習得した技術を媒介にケアという関係性を結んで行くことは、障害のある身体とその生の一部分を担っていくこととなるのである。ここでは、「介護者」「介助者」といったケアする者として、筆者は位置づけられていく。そのような関係性の中で、新しい気付きも生まれる。ある身体障害がある若者の吸引を行ったとき、どうしても気管カニューレの中にうまくチューブが入らないことがあった。その時に、彼は、人工呼吸器を外した状態にありながら、筆者へ手技の助言(「もう少し斜めから入れるとうまく入るよ」)をする場面があった。同様に筆者がトイレや食事の介護・介助時において困惑した時に、方法を指導してくれたり、助言してくれるといったように筆者をケアしてくれる当事者の姿があった。いわば、初学者の筆者にとっての熟練者(異なる身体を生きる先達者)のような存在として、彼ら・彼女らが顕在化する場面に遭遇するのである。ここには、一見パターナリスティックに語られがちなケアという関係性が、現場においてケアする専門職からケアされる障害がある人への一方的なものではなく、相互の身体の間で生まれる相互的で共同性を持った実践であることが強く意識されるのである。

②関与する身体

以上のように、資格取得というプロセスと、その後の自己とフィールドでの関係性の変容について述べた。改めて、フィールドワークを行っている、そこでの人々の営みとその身体を基盤にして生み出されているという自明の理に気付かされる。筆者のフィールドである医療福祉に関わるコミュニティは、障害

と見なされる身体を中心にして、障害がある人、それをケアする専門職、それぞれの持つ身体の交わりによって成立していることが見えてくる。そして、その身体には、それぞれの時間を通した獲得した履歴が刻印されている。当然、障害がある身体の実験や専門職の人たちの習得した技術といった多様なものがそこには含み込まれている。その中で身体は、様々な権力作用の中で、制度的に枠付けられる一方で、個々が主体的に生を営もうと試行錯誤する身体でもある。筆者の身体もまたそのような権力作用を逃れることができない。そのようなダイナミックな現場に、筆者もその身体を通じ、現場へ参入し、徐々にフィールドワークを通し参与を深めていく訳であるが、それは一方で自身の身体を他者との身体との関係性のなかで不断に更新しつつ、そのコミュニティの一部になっていく過程であると言えるだろう。

[1]介護職員実務者研修とは、介護職のプロフェッショナル化という国家施策の中で、介護福祉士の国家試験を受けるための要件として設けられた研修である。この研修に、3年以上の実務経験を加え、介護福祉士国家試験を受験することができる。

[2]都道府県知事の登録を受けて、登録研修機関になることができる。その登録要件としては、①基本研修及び実地研修を行うこと、②医師・看護師その他の者が講師として喀痰吸引等研修に従事すること、③喀痰吸引等研修を適切かつ確実に実施にたること、としている。

[3]筆者の受けた講義においては、介護福祉士養成用のテキストが用いられた。全9冊（「人間の尊厳と自立/社会の理解Ⅰ・Ⅱ」「介護の基本Ⅰ・Ⅱ」「コミュニケーションの技術」「生活支援技術Ⅰ・Ⅱ」「介護過程Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「発達と老化の理解Ⅰ・Ⅱ/認知症の理解Ⅰ・Ⅱ」「障害の理解Ⅰ・Ⅱ」「こころとからだのしくみⅠ・Ⅱ」「医療的ケア 介護職員等による喀痰吸引・経管栄養」）のテキストを使用した。

[4]呼吸に困難がある者等が、気管を切開し、カニューレと呼ばれる空気の出し入れをする管を移植する。

[5]栄養を通す管は、経鼻部もしくは胃ろう部からとなるが、流動状や半固形状等といった栄養剤の種類や、注入の時間等、細かな方法に分かれていく。

おわりに

4 人の執筆者に共通するのは特定の技能を中心に形成されるフィールドにおいて観察だけの方法に限界を感じ自らも技能の習得を試みることでフィールドに対するより深い参入と理解を目指している点である。執筆者たちは技能を身に付けさえすれば深い参入や理解が得られるわけでないことを十分承知の上で、それでも技能の習得を自らに課しフィールドの新参者として関わろうとしている。とくに翁や宮本のように介護や医療の現場をフィールドにする場合、技能の（資格）の有る無しはフィールドへの参与を決定的に左右するためその持つ意味はさらに大きい。その意味では彼らに選択の余地などないのであるが、それでもその関門を越えてもさらに分きたいという対象への強い関心が感じられる。この技能の取得を通して対象により強く関わりたいという意識は同じく金子や坂元の芸能の現場にも見いだされる。実際、坂元を除く3名の執筆者はこの修得（取得）の過程を経ることでフィールドの戸羽口に立つことができおり、またそれを契機に関係者のネットワークも拡大させている。初心者として技能を習得しようとする執筆者たちの試みは確かにフィールドとの関係性を変容させているようである。さらにこ

の変容はそこに技能の習得と実践をめぐる身体的、対話的な相互作用を含むことで観察者としての参与だけでは達成しづらい「関与と共感」の関わりも予感させるものとなっている。

技能の習得はフィールドとの関係性を社会的次元で変容させるだけでなく身体的次元でも変容させる。執筆者たちは技能の習得を経ることで以前とは異なる新しい身体(技法)を持つようになった。いうまでもなくこの変容は自己完結的なものではなくフィールドの他者の身体との関係において捉えられるべきである。それは研修や介護現場において直接的な身体接触(翁の受けた役割実習)はもちろんのこと、宮本のケアの実践を通した他者の個別的な身体との相互作用(「すり合わせる」)によって不断に更新される身体(技法)の在り様である。それはまた芸能それ自体に魅惑される(快美感覚を共有する仲間になる)ことや舞台での一体感に浸る(陶酔的な情動を分かち合う)ことにより生み出される共感的身体でもある。舞台上や練習の場、研修の場あるいは実際の現場などそれぞれ場の性格は異なるけれどフィールドワーカーの身体は周囲の他者の身体との協応のなかで常に新たな身体を得ており、その身体は場や周囲との関係性なしに存在しえない。フィールドワーカーの技能習得はその身体的次元においてもフィールドとの関係性の変容に深くかかわっている。

最後に、フィールドワーカー自身の技能の習得に関してそれが事後的にもたらされている点にも触れておきたい。執筆者たちは初めから参入の方法あるいは手段として計画的に技能習得に取り組んだわけではない。各人がそれぞれの問題意識をもってフィールドに関わるなかで「成り行きとして」そうした方法の必要性(あるいは必然性)を感じるようになっていく。それはフィールドワーカーの計画性の欠如に由来するというよりも、つねに新参者として参入しその場において課題発見をめざす人類学的フィールドワークの基本的な立ち位置を表現していると考えている。

* 本稿は、平成26年度科学研究費「身体知としての「参与しつつの観察」に関する基礎研究」(基盤研究(B)課題番号 14502132:研究代表者 南 博文)の一環として、共同研究者である坂元によって企画されたものである。

〈参考文献〉

- 梅田英春 2015「データの取り方 2 体得する」『人はなぜフィールドに行くのか』(床呂郁哉編) pp.126-140.東京外国語大学出版会
- 大西秀之 2014『技術と身体民族誌』p55、p113.昭和堂
- 翁文静 2013「中国上海市における家事労働者の養成プロセスについて―月嫂(SAO)を中心に―」『発達社会学研究』第5号
- 小國和子、亀井伸孝、飯嶋秀治[編著]『支援のフィールドワーク―開発と福祉の現場から―』2011,世界思想社
- 金子真紀 2015「在日コリアンの文化的実践とアイデンティティー―生野民族文化祭に着目して―」、九州

大学大学院人間環境学府教育システム専攻 平成 26 年度修士論文

坂元一光 2014「愛でる身体と作る身体－柳川の伝統手芸活動における技術的实践－」『国際教育文化研究』2014.8、第 14 号、pp. 1-13

寺田吉孝 2010「なぜマイノリティは音楽に関わるのか」『民博通信 No.129』、pp.22-23, 国立民族学博物館

吉田ゆか子 2011「フィールドでの芸能修行」『フィールドワーカーズ・ハンドブック』（鏡味治也他編）pp.110-131. 世界思想社

Field-notes on participant observation through practical and experience-based lessons of community-specific skill

Ikko SAKAMOTO Wenjing WENG Satoshi MIYAMOTO Maki KANEKO

In this study, I will introduce four examples of fieldwork regarding communities of practice formed from people who share technical skills (or qualifications) in traditional arts, medical care, or social welfare. I will show how efforts to obtain these skills by field workers deepen their participation in and sympathetic relations to these communities. When field workers engage in skill acquisition within communities of people who have special skills, 1) field workers can deepen their understanding of the technical practices and culture of the community members through embodied knowing and 2) in the early phases of skill acquisition, the field worker becomes aware of his or her two-fold role as a newcomer to the community and beginner in terms of skill acquisition. Thus, this study serves as a valuable opportunity to reaffirm the basic role of the field worker as a *learner*, which is often forgotten amidst recent trends in research and education on fieldwork that emphasize (or take for granted) the proposals and solutions of problems from the standpoint of specialists.